

市民活動

のひろば

(特集)

チェルノブイリ40年、フクシマ15年

続く被害と加害



- 2 ● 非核・平和を求める写真絵画展事務局「子どもたちの絵は訴え続ける―核の悲劇を風化させないために」
特 ● 青木一政「住民・労働者に内部被曝をもたらす―「放射能汚染土」再利用」
集 ● 市民が育てる「チェルノブイリ法日本版」の会
「原発事故被害補償は国の責任―誰にも1 msv以上の追加被曝をさせない」
● 福井ともき「被害者の力 かづく文化の築き」
14 〈おたよりありがとう〉『市民活動のひろば』原発・放射能汚染・震災関連特集一覧
16 新連載〈スマホは便利か面倒か〉①確定申告の巻 AYA
17 連載〈100歳日記⑨〉中山三平
18 〈本〉宗像充『知識・経験ゼロからの市民運動スタートガイド』
19 原稿・執筆者募集「私の好きな憲法条文」「三多摩で暮らして」
20 連載〈虫めがね96〉柴田紀子 トホシテントウ「敵か？見方か？」
〈アンティ多摩24周年集会案内〉〈まどべ〉〈ありがとう〉

／別冊〈情報編〉16頁

企画・発行・◎：市民活動サポートセンター・アンティ多摩（市民活動のひろば）発行委員会

原発事故被害補償は国の責任

— 誰にも—msv 以上の追加被曝をさせない

市民が育てる「チェルノブイリ法日本版」の会 柳原敏夫

■「What time is it?」 あべこべの時代

この質問はチャップリンの映画「独裁者」の冒頭に出てくるセリフです。戦場で、兵士チャップリンが上官と雲の中を飛行中、知らない間に飛行機がさかさに飛び、表題の質問に彼が懐から懐中時計を取り出すと時計の鎖がとび上がってビククリするシーンです。

そのシーンが示すように、答えはあべこべの時代です。このあべこべが現代でも続いている。しかも現代はそのあべこべが前例のないくらい極端なまでに進んだ時代です。

なぜなら、現代は3・11後＝原発事故後の社会だからです。原発事故とは何か。それは人類が推し進めてきた科学技術の最先端で登場した、最先端の科学技術がもたらした最先端のカタストロフィー（大惨事）だつ

た。つまり、原発事故は私たちの科学技術の栄華の成れの果ての姿です。

その結果、3・11後の日本社会は原発事故の救済を全面的にネグレクト（放置）する人権侵害のゴミ屋敷となった。そこでは、原発事故を起こした加害者たちは救済者のつらをして、命の「復興」は言わず、「経済復興」と叫んで堂々と開き直り、命に危険にさらされた被害者は「助けて」という声すら上げられず、上げようものなら経済「復興」の妨害者として迫害される、あたかも密猟者が狩場の番人を、盗人が警察官を演じている。安全を振りまくニセ科学が科学とされ、危険を警鐘する科学がニセ科学扱いされる、狂気が正気とされ、正気が狂気扱いされるといふあべこべが出現したからです。なぜ、3・11後の日本社会はこのようなあべこべの、そして人権侵



害のゴミ屋敷社会になってしまったのか。

■科学技術事故が犯した自然破壊と犯罪

注意深く観察すると科学技術によって引き起こされた事故はいつも2つの顔を持っています。

1つは「自然対人間」の関係で見せる顔。もう1つは「人間対人間」の関係で見せる顔。

「自然対人間」の関係で原発事故が示す本質は空間的にも時間的にも前例のない「惨



劇」です。40秒足らずの実験の暴走で欧州全土が人の住めなくなる寸前までいったチェルノブイリ事故。2号機に水が入らず、東日本全滅を覚悟した福島原発事故。時間的には「これから100年放射能と付き合うために」（菅谷昭前松本市長）という覚悟が問われる。

さらに原発事故はそれだけでは済まない。もう1つの顔が存在する。それが原発事故が「人間対人間」の関係で示す顔、その本質は「犯罪」です。チェルノブイリ事故で欧州全土を

救った物理学者のワシリー・ネステレンコ、その彼に与えられた恩賞は所長の地位解任とKGB(ソ連の諜報機関)による二度の暗殺計画でした。理由は、国から「パニックを煽るろくでなし」と警告されたにもかかわらず、放射能を感知する器官を持たない汚染地の住民たちが無防備なまま取り残されているのに対し、彼らの保護を訴え続けたからです。

福島原発事故も、いくら健康被害が発生しても国は「私たちは何も知らない、語れない」。チェルノブイリですら認定された原発事故と小児甲状腺がんとの因果関係も今なお頑なに認めようとしません。にもかかわらず、敢えて健康被害を語ると、漫画『美味しんぼ』のように、「パニックを煽るろくでなし」「今日ではより洗練された言葉で「風評被害」と罵られる。それは国の確固たる信念と世論操作に基づいたもので、もはや単なる事故ではなく、226事件、サリン事件のように事件・犯罪と呼ぶのがふさわしい。それが311事件です。その結果、出現したのが最先端の科学技術がもたらした最先端の大惨事である原発事故を前にして、その救済を全面的にネグレクト(放置)し、至る所が人権侵害のゴミ屋敷と化した日本社会。

■放射能汚染・健康被害の現実
異を唱えない構造をつくってきた国

ゴミ屋敷についてもまた、科学技術によって引き起こされた事故が持つ2つの顔が厄介さを倍加する。1つ目の顔が「自然対人間の関係での厄介。それが「見えない、臭わない、味もしない、理想的な毒」である放射能の特質がフルに反映した、見えない、臭わないゴミ屋敷。それは私たちの五感の通用しない「日常生活」と分断された被ばくがもたらす放射能汚染と健康被害の壮大なゴミ屋敷。

もう1つの顔が「人間対人間」の関係での厄介。それが私たち市民が、単に今日の国や科学者の政策に翻弄されているばかりではなく、明治維新以来ずっと市民を支配してきた国や科学者の政策に今なお翻弄され続けているという事実。とりわけそれは、小児甲状腺がんだけでも明らかですが、放射能による健康影響に声をあげない医療関係者たちの中に顕著に現れている。

それは七三一部隊の伝統が水面下で悪夢のように今も医療関係者たちをがんじがらめに押さえつけているからです。そこで日常的に行なわれた人体実験は重大な犯罪だった。しかし、この犯罪は戦後、裁かれなかった。米国

